

2021 年度 関西大学総合情報学部
帰国生徒入学試験問題

小 論 文

注意事項

- 問題は 2 種類あります。問題A、問題Bのうちいずれか1つを選択し、解答してください。両方を解答することはできません。
- 解答用紙は、必ず、選択した問題番号用の用紙を使ってください。
- 試験時間は 90 分です。

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

- 【問1】「グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじってはいは迷惑する。」とはどういう意味かを200字以内で述べなさい。
- 【問2】「グライダー論文」とは、どのような論文かを150字以内で説明しなさい。
- 【問3】大学とはどのような場なのかについて、本文のように飛行物体など何か物に喩(たと)えて500字以内で説明しなさい。

いまの社会は、つよい学校信仰ともいべきものをもっている。全国の中学生の九十四パーセントまでが高校へ進学している。高校くらい出ておかなければ……と言う。

ところで、学校の生徒は、先生と教科書にひっぱられて勉強する。自学自習ということばこそあるけれども、独力で知識を得るのではない。いわばグライダーのようなものだ。自力では飛び上がることはできない。

グライダーと飛行機は遠くからみると、似ている。空を飛ぶのも同じで、グライダーが音もなく優雅に滑空しているさまは、飛行機よりもむしろ美しいくらいだ。ただ、悲しいかな、自力で飛ぶことができない。

学校はグライダー人間の訓練所である。飛行機人間はつくらない。グライダーの練習に、エンジンのついた飛行機などがまじってはいは迷惑する。危険だ。学校では、ひっぱられるままに、どこへでもついて行く従順さが尊重される。勝手に飛び上がったりは規律違反。たちまちチェックされる。やがてそれぞれにグライダーらしくなって卒業する。

優等生はグライダーとして優秀なのである。飛べそうではないか、ひとつ飛んでみる、などと言われても困る。指導するものがあつてのグライダーである。

グライダーとしては一流である学生が、卒業間際になって論文を書くことになる。これはこれまでの勉強といささか勝手が違う。何でも自由に自分の好きなことを書いてみよ、というのが論文である。グライダーは途方にくれる。突如としてこれまでとまるで違ったことを要求されても、できるわけがない。グライダーとして優秀な学生ほどあわてる。

そういう学生が教師のところへ“相談”にくる。ろくに自分の考えもなしにやってきたってしかたがないではないか。教師に手とり足とりしてもらって書いても論文にはならない。そんなことを言って突っぱねる教師がいようものなら、グライダー学生は、あの先生はろくに指導もしてくれない、と口をとがらしてその非を鳴らすのである。

そして面倒見のいい先生のところへかけ込み、あれを読め、これを見よと入れ知恵してもらい、めでたくグライダー論文を作成する。卒業論文はそういうのが大部分と言っても過言ではあるまい。

いわゆる成績のいい学生ほど、この論文にてこずるようだ。言われた通りのことをするのは得意だが、自分で考えてテーマをもてと言われるのは苦手である。長年のグライダー訓練ではいつもかならず曳いてくれるものがある。それになれると、自力飛行の力を失ってしまうのかもしれない。

もちろん例外はあるけれども、一般に、学校教育を受けた期間が長ければ長いほど、自力飛翔の能力は低下する。グライダーでうまく飛べるのに、危ない飛行機になりたくないのは当たり前であろう。

こどもというものは実に創造的である。たいていのこどもは勞せずして詩人であり、小発明家である。ところが、学校で知識を与えられるにつれて、散文的になり、人まねがうまくなる。昔の芸術家が学校教育を警戒したのは、たんなる感情論ではなかったと思われる。飛行機を作ろうとしているのに、グライダー学校にいつまでもグズグズしてはいけけないのははっきりしている。

出典：外山滋比古著「思考の整理学」 筑摩書房 1986年（出題の都合上一部改変）

以上

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

- 【問1】第二次世界大戦時に「科学に国境なし、されど科学者に祖国あり」と言われたのは、どういう意味で言われたのかを200字以内で説明しなさい。
- 【問2】「科学は実用を目的としていないが、実用は科学から生まれる」とはどういう意味で言われたのかを150字以内で説明しなさい。
- 【問3】この文章は、第二次世界大戦終結から10年の時点で書かれたものである。それから65年たった現代において、「科学に国境なし、されど科学者に祖国あり」という言葉はどのようにとらえられるかについて、あなたの見解を400字以内で述べなさい。

科学と国境という問題は、以前から論議されてきた課題であるが、原子力の解放にまで到達した今日の新しい時代になってみると、急激にその切実さを増してきた感がある。

第二次世界大戦の前ごろ、一時この問題が、大分騒がれたことがある。あの時代は、一口にいえば、国家主義的な風潮が、世界的に広まっていた時代であった。したがってこの問題は、とかくそれぞれの国における軍の機密の問題と、関連がつけられがちであった。しかしそれは表面に現われた形であって、その根元には、科学の世界性と超国家主義的風潮との争いがあったといった方がよいであろう。

当時流行した言葉の中に、「科学に国境なし、されど科学者に祖国あり」というのがあった。たしかパスツールの言だったように記憶しているが、それは誰でもよい。この言葉は、当時の国家主義者たちにも、聞こえがよかったし、またジャーナリズムの上でも、大いにもてはやされたものである。

この言葉は、文字どおりに素直に解釈した意味では、誰にも同感されるであろう。しかし祖国などという、どうしても、一旦緩急あればというような連想が浮かぶので、しばらく敬遠しておいた方がよさそうである。

この言葉でも感じられるように、科学と国境の問題は、従来は戦争を背景として、考えられる傾向があった。それももちろん重大な案件であるが、それだけならば、まだ話が簡単であるともいえる。戦争をしなければすむ話であるし、また何と云っても、戦争の期間は、非戦争状態の期間よりも短いからである。

一番やっかいなことは、世界が今日のような形の科学文明の時代になって来ると、この問題が、平時においても、非常に深刻な意味をもって来る点である。地震や台風のような天災も怖い、じりじりと亡び行く国土の問題の方が、ある意味では、もっと恐ろしい。そういう意味で、本文では、平時における「科学と国境」の話を含めて、とりあげることにしよう。

初めに断っておくべきことは、科学という言葉の意味である。ここでは、もちろん自然科学を指しているが、それは学問的な定義で使っているわけではない。敗戦後の西ドイツが、今日非常に健全な復興ぶりを示したのは、科学による国家の再建を国是としたからである、とよくいわれる。こういう場合に使われる科学という言葉は、実はその意味が、はなはだあいまいなのである。しかし今日わが国で、科学による増産とか、科学的な対策とか、という風に使われているのは、このあいまいな意味での科学である。

科学の本来の姿は、自然の本性を見きわめ、その間に秘められている法則を見つける学問、とっていいであろう。したがって、科学は直接国民の幸福とか、国力の回復とかに寄与するものではない。そういうことを目的としていないのであるから、当然な話である。しかし人間が生物として、この自然界に住んでいる以上、自然界の原理や法則をよく知れば、いろいろ便宜が得られる。したがって、科学は実用を目的としていないが、実用は科学から生まれるのである。

もっともこういうことは、今までにもしばしば言われている話で、何もこと新しく述べ立てるまでもない。しかしこの言葉、すなわち実用は科学から生まれるというのが、案外の曲者で、実はそう容易には生まれないのである。そしてその間に、国境の問題が奥深く入り込む余地があるように思われる。

出典：中谷宇吉郎著「知られざるアメリカ」 文藝春秋新社 1955年（出題の都合上一部改変）

以上